

圧倒的な勝利者 (2)

【聖書箇所】 8章 31～39節

はじめに

●ローマ人への手紙は使徒パウロによって書かれたものですが、そのパウロは他の手紙(Ⅱコリント 1:8～9)で次のように記しています。

【新改訳改訂第3版】Ⅱコリント1章 8～9節

8 兄弟たちよ。私たちがアジアで会った苦しみについて、ぜひ知っておいてください。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにはいのちさえも危うくなり

9 ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。

●「非常に激しい、耐えられないほどの圧迫」を受けたとあります。そのような圧迫、試練を経験したパウロが、それに勝利を得た秘訣は何だったのでしょうか。私たちも、勇気を失い、すべてを投げ出してしまいたくなるような圧迫や試練にぶつかったとき、どうしたら良いのでしょうか。

●英国が生んだ説教者、伝道者のひとりスポルジョンという人は、その驚異的な伝道活動は今日においても高く評価されています。そのスポルジョンが、あるとき説教の中で「私は恐ろしいほど気分が落ち込んでいるので、私が味わっているような極度のみじめさをだれにも経験してほしくない、と思っている。」と語ったそうです。落ち込むこと、失望落胆は成功しなかった人よりも、はるかに多くの成功をした人を襲うと言われます。高く登るほど落ちた時の落差が大きくなるからです。旧約聖書に登場する預言者エリヤがそうでした。偶像礼拝との戦いにおいて大勝利をおさめながら、その後、后(きさき)イザベルの執拗な追跡によって彼はひどく落ち込んだのです。今日の言葉でいうならば、「燃え尽き症候群」に陥ったのです。使徒パウロもそうでした。「耐えられないほど圧迫されて」、ついに「生きる望みさえ失ってしまった」ということが書かれているということは、パウロがどんなに強靱な精神力をもった優れた人であつたとしても、やはり私たちと同じ人間であるということです。その彼が倒されても滅びず、途方にくれても行き詰らなかったのはなぜでしょうか。それは自分自身に頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼んだからです。

●ローマ書 8章の終りにおいて、私たちがどんな苦難や圧迫があつたとしても、その中にあって私たちが圧倒的な勝利者とさせてくださる方、その方こそ私たちの神です。この方にこそ、私たちは目を留めるべきです。これまでローマ書を学んできて分かったことは、神に背を向け、自分の好き勝手にやってきた罪人である私たちに対して、神は愛なる方であり、また恵みに満ちた方であるということです。その結論を敢えて一言で言うなら、「**神は私たちの味方である**」ということです。このことは幻想でも、思い込みでもなく、決して間違いのない確かな事実であるということです。神を敵に回して私たちの勝目はありません。

天と地を造られた神が、私たちの味方であるとは何とすばらしい事でしょうか。一口に、神と言っても、そこには御父、御子、そして御霊なる神がこぞって、それぞれの面において、私たちの味方となって、私たちに限りない愛を注いでくださっているのです。8章の最後の部分はまさに**至上の頌栄**であると、ある人は述べています。実際に説教を準備してみると、この箇所は非常に難しい箇所だと改めて感じられます。なぜなら、ここには至上の感謝と喜びが満ち溢れていて、それゆえに人間的な言葉で説明することが容易ではないからです。講解説教しながら、後悔してしまうところです。

1. 父なる神の愛(出し惜しみしない味方)

●まず、御父の惜しみない愛が注がれています。32節、父なる神は「私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜みず死にわたされた方」であると記されています。父なる神は御子の血でもって、ご自身の私たちに対する愛の証文に血判を押されました。私たちが不敬虔であったにもかかわらず、罪人であったにもかかわらず、また敵であったにもかかわらずです。御父は「惜しみなく」ご自身の御子を死に渡されました。いやいやながら、惜しみながら、もったいないと思いつつ、ということでは決してありません。少しも惜みず、しかも最も良いもの、最上のものを与えることのできる父、その父こそ私たちの味方なのです。

●旧約聖書の最初の王となったサウルは、神が滅ぼせよという命令を聞かずに、最も良いものを惜しんで、値打ちのないものを聖絶しました。聖絶とは神のものを神にささげる行為を意味しますが、神にささげるべきものの中の「最も良いもの」を惜しんで自分のものとしたのです。それゆえ、神は彼を王に任じたことを悔いたのでした。私たちはサウルのように、良いものであればあるほど、価値があればあるほど、惜しむ気持ちが働きます。もったいないと思うのです。与えることを惜しむのです。

●信仰の父と言われたアブラハムは、自分のひとり子(イサク)を惜しまないで神にささげようとしていました。アブラハムにとって、子のイサクは彼自身の望みであり、いのちであり、すべてでした。これを神にささげるということは、自分の死に勝る苦痛であったと思います。しかしアブラハムは神によってその子をささげるように命じられたとき、惜しまなかったのです。そのことを確認した神は、イサクをいけにえとしてささげることをとどめられました。ところが、神はだれからも命じられたわけではありません。全く自発的に、あたかも自分のひとり子よりも私たちを愛しておられるかのように、惜しむことなく、いさぎよく、私たちのために死に渡されたのです。「渡す」とは、死刑執行のために引き渡されるという意味です。

●神を恐れない者のために、不敬虔な者のために、神に敵対する私たちのために、本来、さばかれるべき私たちに代えて、御子イエシュアの栄光をはぎ取って、恥辱の十字架の死に引き渡し、さばき、捨てたのです。これらのことはすべて「私のため」、「あなたのため」でした。この神が私たちの味方であってくださるのです。最も大切なものを、最高のものを惜しむことなく、渡してくださった方が、どうして私たちに必要なすべての恵みをくださらないことがあるのでしょうか。事実、父なる神は、御子を通して天にある

すべての霊的祝福をもって私たちに祝福して下さるお方です。けちな方ではありません。神は祝福に充ちた唯一の主権者なのです。

●ヤコブの手紙 1 章 17 節には「すべての良い贈り物、またすべての完全な賜物は、上から来るのであって、光を造られた父から下るのです。」とあります(※ちなみに、「光を造られた父」というのは原文にありません。原文は「光(複数)の父」となっています)。ですから、もし「あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなく、お与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。」(ただし、少しも疑わずに、信じて願いなさい)

●私たちはどんなことがあっても、誰に対しても、惜しむことをしない父の愛を決して疑ってはならないのです。この世において、父なる神ほど確かで、変わることはない方はおりません。この神が私の味方なのです。「主は私の味方、私は恐れない。人は私に何ができよう。」(詩篇 118:6)。人だけでなく、天にあるもの地にあるものすべて、私たちをこの御父から引き離そうとするすべてのものに対して、パウロはこう述べています。

【新改訳改訂第3版】ローマ書 8 章 38～39 節

38 私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、

39 高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

●父なる神と私たちを引き離すことは、いかなる力をもってしても不可能なのです。それほどに神の私たちに対する愛は強いのだということです。私たちが御父に対する愛ではなく、御父が私に対する愛が、何をもって引き裂くことができないということです。ある人がこう言っていたのを思い起こします。「私たちの神は、こと人間のことになると取り乱してしまわれる方だ。」と。なんとすばらしい表現でしょうか。果たして、私たちはそのように確信できるでしょうか。

2. 御子イエシュアの愛

●次に、御子イエシュアの愛を見たいと思います。34 節に「罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いやよみがえられた方であるキリスト・イエスが神の右の座に着き、私たちのためにとりなして下さるのです。」。このみことばは、今も変わることなく、厳然として、私たち一人ひとりのために神の右の座について、とりなし続けてくださっているイエシュアの愛を知ることができます。

●私たちには、私たちを日夜、告発する敵であるサタンがいます。もし私たちが神のみことばによって支配されていないならば、サタンは私たちの信仰をぐらつかせ、失望させようとしています。そしてそのことを

通して、本当の信仰者とそうでない者とがふるいにかけてられるのです。

●イエシュアの弟子シモン・ペテロは、イエシュアに「先生、他の人がつまずいても、私だけはついて行きます。」と言いました。けれども、そう言った舌の乾かぬうちに、師を裏切りました。けれどもイエシュアはペテロが裏切る事になることを予見していました。そしてこう言ったのです。「シモン、シモン。見なさい。サタンがあなたを麦のようにふるいにかけてることを願って聞き届けられました。しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちをカづけてやりなさい」。するとペテロは「いいえ、その必要はありません。主よ。ごいっしょなら、牢であろうと、死であろうと、覚悟はできております」。けれどもイエシュアは言いました。「ペテロ。気をつけなさい。おまえは、自分だけは大丈夫だと言っているが、おまえは、鶏が鳴く前に(つまり、夜明け前に)三度、わたしを拒むであろう。でもおまえの信仰がなくならないように祈っている」と約束されたのでした。

●案の定、ペテロはイエシュアの言われたように、主を裏切ったのです。サタンは当然のごとく、ペテロを猛烈に告発することができます。この告発に対して、ペテロは太刀打ちすることはできなかったはずで、私たちがペテロのような過ちを犯したりする人を告発するかもしれません。しかし主は、彼を罪に定めなかったのです。姦淫の現場を押さえられた女がイエシュアの前に引き出されたときにも、イエシュアは「わたしもあなたを罪に定めない」と言われました。

●弟子の一人で同じくイエシュアを裏切り、金でイエシュアを売ったイスカリオテのユダがいます。彼は銀貨 30 枚でイエシュアを売ったのですが、そのことを後悔して、首をつって自殺しました。しかし、同じく主を裏切ったペテロはイエシュアのとりなしの祈りによって、再び、生かされて、イエシュアのためにいのちを捨てる者と変えられたのでした。

●ペテロとユダの違いは何でしょうか。それは、ユダの中にはイエシュアに対する信仰がありませんでした。しかしペテロの内にはそれがあったということです。ですから、イエシュアは「あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った」と言われたのです。どんな小さな信仰でも、あるとないとは大違いです。ペテロの内には小さな信仰があったために、イエシュアが彼のためにとりなしたゆえに、彼は悔い改めて立ち直ることができたのです。

●とりなしの愛、イエシュアは今も神の右の座に着かれて、私たちの信仰がなくならないように、むしろそれが働くように一人ひとりのためにとりなしておられるのです。もし、イエシュアのとりなしがなかったとしたら、私たちは信仰を持ち続けることはできないのです。そのことをあなたは知っていますか。私たちはいろいろな点で、多かれ少なかれ、イエシュアを裏切っていることがあるからです。もし、サタンにそこを突かれたなら、胸を張ってイエシュアの前に出られません。しかし、だれも私たちが罪に定めることはできません。なぜなら、イエシュアは私たちのために死んでくださり、また私たちのために生きて、とりなし続けて下さっているからです。

●私たちの信仰の生涯には、苦しみがあり、悩みがあり、弱さがあり、病があり、危険があります。しかしそれらが、私たちをキリストの愛から引き離すことはできないのです。むしろ、そうした諸問題を通して、ますます信仰が成長し、聖別され、純粋にされて、キリストの愛の絆が強められて、キリストとともに歩むようになるのです。なぜなら、「私たちの信仰がなくならないように」、私たちのために今もとりなしておられる主がおられるからです。

【新改訳改訂第3版】ヘブル人への手紙4章14～16節

14 さて、私たちのためには、もろもろの天を通られた偉大な大祭司である神の子イエスがおられるのですから、私たちの信仰の告白を堅く保とうではありませんか。

15 私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。

16 ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。

3. 御霊の愛

●最後に、私たちの内において、御父の惜しみない愛とキリストの真実なとりなしの愛をつなげて下さっている御霊なる方がおられます。ローマ書5章5節には「私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」とあります。御父と御子の愛をしっかりと受け止めることを助けてくださる方がおられて、私たちの内側から「うめき」をもってとりなして下さる方です。

●私たちは自分の力ではなく、御父の惜しみない愛とキリストの真実なとりなしの愛、そして私たちの内側からうめきをもってとりなして下さる御霊の愛によって、はじめて「**圧倒的な勝利者**」となることができるのです。いずれが欠けてもそのような者になることはできません。

●この三位一体の神が私たちの味方なのです。この三位一体のゆるぎない愛によって、だれも敵対することができないのです。ですから、私たちはこの三位一体なる神に対して、より深い確信と信頼をもって応える以外には何もありません。私たち一人ひとりが一層の信仰をもって、神を味方にする信仰者となるように、祈りましょう。

1995.4.02